

Exploring the Takarazuka world: An ethnographic study of Takarazuka Revue's marketing strategies, urban space, and fan culture development

(タカラヅカ世界のエスノグラフィー：宝塚歌劇の経営戦略、都市空間、ファン文化に関する研究)

Baraniak-Hirata Zuzanna Maria

日本のエンターテインメント産業は、長期的な人口減少に伴う観客減少の問題に直面し、転機の時を迎えている。100年以上の歴史を持つ宝塚歌劇も例外ではない。2014年に設立100周年を迎えた宝塚歌劇は華やかな演出で女性の「夢の世界」として知られている。阪神間の郊外で温泉施設の余暇として誕生した宝塚歌劇団は現在、日本の最大級の歌劇団であり、年間270万人以上の観客動員数を突破している。女性出演者のみで構成されている宝塚歌劇に関するこれまでの先行研究では、男役（＝男性役を専門とする役者）の独特なクロス＝ジェンダード・パフォーマンス（cross-gendered performance）やその熱烈的なファンが大きく注目され、それらの親密な関係が宝塚歌劇団の商業的な成功をもたらしたと主張されてきた。しかし、阪急電鉄の一部門でもある宝塚歌劇の経営戦略は戦前の創設期以降にほとんど議論されておらず、宝塚歌劇のファン文化の形成過程、及び宝塚歌劇の本拠地である宝塚大劇場周辺の都市空間と宝塚ファンコミュニティの実践との関連もいまだに明確になっていない。

本論文は、日本における宝塚ファン文化現象に焦点を当て、空間論を中心とする理論的枠組みを用いたエスノグラフィックな研究である。具体的には、宝塚ファン文化の〈聖地〉と呼ばれる宝塚歌劇団の本拠地、兵庫県宝塚市にある宝塚大劇場に着目し、劇場周辺の都市空間がファンコミュニティによっていかに認識され、いかなる意味を持ち、宝塚ファン文化の形成・維持過程によって重要視されているかを解明する。

本論文では、複合的な研究手法を採用し、二次資料調査、住み込み型フィールドワークでの参与観察及び徹底的な面接調査、認知地図（sketch maps）と Qual-GIS（Qualitative Geographic Information System、地理情報システム上で質的データの収集及び分析を行う手法）を用いた調査、及びライフストーリー調査を行った。

まずは、先行研究及び二次資料調査の結果を踏まえ、宝塚歌劇の創設者・小林一三のレガシーと少女文化とその消費行動との親密な関係性を概観し、女性のファンから成り立つ宝塚歌劇団のファン文化及び宝塚歌劇の経営戦略の系譜と実践を析出し、タカラヅカ世界の基盤を描き出す。その結果、宝塚ファンの高密度で高関与度の消費行動において、これまで幅広く注目されてきた男役のパフォーマンス及び歌劇団の人材育成制度は不可欠であることを確認したが、多くの場合、それはファンの生涯にわたる観劇体験の一側面に過ぎないことを示した。

次に、参与観察調査並びに面接調査を通じて、宝塚ファン文化の〈聖地〉となる宝塚市中央部・宝塚大劇場周辺の空間形成過程と宝塚ファンの観劇・消費習慣を分析し、今日のタカラヅカ世界の実態を解明する。宝塚ファン文化の〈聖地〉を考察することで、宝塚大劇場をその中核とした公的／私的の宝塚市の都市空間は、従来の歌劇行動を超えた形で宝塚ファンの交差する場として活用されていることを明らかにした。

最後に、認知地図を含む Qual-GIS 調査及びライフストーリー調査の結果に基づき、〈タカラヅカの空間〉と呼ばれる宝塚市中心部の都市空間は宝塚ファンにとっていかに認識され、いかなる意味を持って

いるのかを検討し、次のように議論する。一方において、この空間の中で移動し消費するファンは、タカラヅカ世界を体験することができる。他方において、宝塚大劇場周辺の地理的な空間は、宝塚ファン文化において多次元的な様相を持ち、ファンコミュニティによって継続的に再構築され、居場所づくりの過程と関連付けることができる。こうした地理的に依拠した劇場とその周辺の都市空間は、宝塚歌劇団特有の経営戦略及び宝塚ファンの個人的な消費によって実際に都市的な空間の構築の現実と想像を超え、個々の宝塚ファンの日常的な身体的移動を通して追体験され、タカラヅカ世界を経験する重要な手掛かりとなる。

本論文では、宝塚ファン文化を事例に「ファン文化地理学」と名付けた新しい概念を紹介し、ファン文化の形成・維持過程において地理的な空間の多次元的な様相と緊密に関係していることを解析した。この概念を通して、個々の消費者の認識に基づいて意義づけられ、地域コミュニティを軸とした都市空間の特質は、現代ファン文化の形成過程、体験型消費文化、及び地域開発の場づくり戦略への新しい洞察を示唆している。さらに、本論文で採用した実証的手法と質的認知地図法を組み合わせた独自の複合的な研究アプローチは、ファン研究を広げるだけでなく、都市的文化空間に関する研究分野に新たな多角的アプローチの可能性を拓き、幅広い研究分野への応用も期待できる。